第二章　鳴沢岳遭難事故の背景にあるもの

はじめに

この遭難事故の「背景にあるもの」が何であったかを論考する前に、事故調査委員会で検討した結果の概要のみを記述しておく。

この遭難事故の直接原因はリーダーの判断誤りによるものと推測する以外に他の論拠を見出す事は困難であった。

その主たる理由は、次の３点である。すなわち、引き返さなかった事、隊がバラバラになったこと、気象の変化を見誤ったことなどである。

隊員３名全員が帰らぬ人となってしまったので､遭難の実体を直接的に知る事は出来ず、リーダーに問われる責任が浮上する検証結果となったことは止むを得ない。

二義的には様々な問題を指摘する事が出来るが、今回の事故に至る最終局面、即ち、標高 2600ｍの西尾根の頭から、鳴沢岳山頂 2641ｍの頂上稜線上に達した際の風力、気温、積雪等、当時の現場の環境条件、３人の実際の行動の位置関係や、それぞれの体力や疲労度など重要な要素を知る情報は極めて少なく、県警が遺体発見時の証言以外に３人の絶命に至る現場の直接的実体を知る事はできないのである。伊藤達夫のＧＰＳが示す記録と写真の一部が唯一の情報であった。従って、前途各項で考査した諸データを基に事故調査委員会として予測する以外に手立てはなかった。

特にリーダー伊藤が緊急事態にどのような対応がなされたか､また､なされなかったか、どのように考査検証しても言えることは、３人の遺体が数百メートル程度の位置からバラバラに発見され、絶命に至る過程の中で助け合い、手を差し伸べた形跡がまったく見受けられなかった事である。このことから最も重く考えたいことは、伊藤が登山を始めた頃からの時代背景の中で、どのように行動し、経験を積み、思想を育くみ、判断力を養ってきたかなど、その人柄を知る事に尽きるのである。

今後のためにも登山におけるリーダーの重要性に、より重きを置くべきと考えた所為である。

（一）登山界の現状と大学山岳部

1. 衰退する登山団体の大学山岳部

日本の高齢化社会の到来は、登山と言う言葉すら変えてしまうほど中高年登山ブームが登山界を覆っている。6000ｍ～8000ｍ峰の高齢登頂者はもとより、ヒマラヤを広くトレッキングする高齢者が数多く出現したため、この層を「高所遠足」と分類する専門家もいるほどである。国内の百名山や各県が観光のために指定した名山を登り巡回する実体は、登

山というよりむしろ観光旅行であり、遠足と言っても差し支えないほど人が溢れ、山々はオーバーユースに悲鳴を上げている始末だ。

この現象は、1970 代から 1980 年代中ごろにかけて日本のヒマラヤ登山界がもたらしたアルピニズムの最盛期頃の刺激に端を発しているといえよう。

いまや、ザックを背負って山歩きを楽しんでいる人口を登山者と考えるなら、その数は 800 万人を超えると試算するのが産業界の見かたである。

従来わが国登山の主要山岳団体といわれた日本山岳会、日本山岳協会や日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会などにもその姿に大きな変化が見られ、組織の弱体化が進んでいる。高齢化と従来の組織活動を意図しない人口増加がもたらす変容である。

アルピニズムを支えた先進的、精鋭的山登りを奨励し推進してきた組織が、その機能を失ったからである。このことは、「同人」組織や職場組織として結成された全ての社会人団体についても同様のことが言えよう。

2. 一校主義から個人化・私事化へ

今や、アルペンスタイルによる困難な登攀も、未登峰への対応もすべて個人の意志と行動が可能となった時代の到来である。登山の大衆化の中で、旧来の組織が漂流しているのである。

ましてや、お金を出せば、世界の最高峰に登らせてくれる欧州系の会社組織やシェルパ達の事業として発展してきた商業登山の出現から既に 20 年が経過したが、この組織への応募者は年々増加の傾向にある。

このためもあってか、エベレスト登頂者は近年増加の一途をたどっている。2008 年末現在で、エベレストに登頂した日本人登頂者は述べ 350 名(うち女性 10 人)、登頂者死亡数 7 人となっている。全世界では述べ 4012 名、うち遭難者数は 2007 年の資料で 217 名となっている。参考までにこの数値の著しい増加も近年の登山界の実情を示すものである。

時代の潮流は、自然保護を色濃く提唱したり、森づくりに深く関わる団体や、子どもたちの野外教育を推進する団体のほか、新しく設立された日本山岳文化学会など多様性を示す組織の台頭である。フリークライミング協会、トレッキング協会など、大衆化に伴い登山の関係団体が数多く存立する時代となった。

大学山岳部や OB、OG を中心とする山岳会の「一校主義」の役割が低調となり、日本の高度経済成長の豊かさの中で個人を主張する「個人化・私事化」の傾向が山の世界でも色濃く出始め、自己主張する若者達が増加し、大学山岳部や社会人山岳団体は衰退の一途をたどる事となった。

1986 年、京都府立大学農学研究課助手であった伊藤達夫はこの時期の終わる 1988 年に府大山岳部コーチとして就任、京都・左京労働者山岳会の籍を置きながら、府大山岳部員を伴い、黒部等に積極的な山行を深めていった。

登山界において、大学山岳部や社会人山岳会の組織としての結束を嫌い、安直に山を楽

しめる個人を中心とする「同人」が出現したのもこの時期である。

伊藤の山登りと時を同じくし、自己主張を際立たせた思考性を有してはいたが、登山の本質を見極め、どこまで山を知り、可能性を確かめるかに挑戦していた点では、その後の主張として流行していった困難な条件を自らに課す岩登りのフリー化、アルペン・スタイルで 8000m峰に登る登山思想に連なっているのである。

この時点、すなわち 1990 年初頭、組織登山を主体とする大学山岳部は、登山の多様化に対応できなかったばかりか、その必要性を認めようとしなかったこともあって姿を消し始めたのである。

在籍現役１～２名という現象は、日本全国の大学山岳部で起こり始め、孤立化していく部員たちの支えとなる手立ては無かった。廃部となる大学山岳部が全国に広がり始めた。高度経済成長の中で奮戦し、バブル崩壊の中で行く先を見失った先輩たちが現役の面倒を見る気力はもとより、その時間さえ取れない時代であった。また、卒業する部員の絶対数も少なくなっていたため、登山の基礎技術や安全対策のほか、登山に最も重要な考え方や理念、先輩の信条といった大学山岳部が古くから培ってきた思想といったものを伝授する事は皆無となっていったのである。

山岳部の再建を目指す途上では、部員の数が少なく取り残された現役たちは、山へ一緒に行き、連れて行ってくれる人であれば誰でもよかったから、組織より個人の意志を優先させていく結果となったのである。現役部員が１～２名という府立大学山岳部における伊藤コーチと現役部員との結びつきは、現在の大学山岳部の一般的な傾向を代弁しているといえるだろう。大学山岳部や社会人山岳会の戦後５０年に及ぶ伝統的な山登りがこの１０年余りの間に影を潜め、衰退の一路をたどったといえる。組織から離れ、「個人化・私事化」の方向にシフトしたとはいえ、そのことがすぐに前段で述べた中高年登山ブームを作り上げた思想とは意を異にすると考えたい。

3. 見直されるか、大学山岳部

ここ２～３年、大学山岳部に若者が戻り始めた。その多くは、国際化され、やがてオリンピック競技種目に参入しようとするスポーツクライミングが盛んになってきたためである。大学の中には、このための施設を作り、部員の獲得に力を入れ始めた学校もある。また、現役部員によるヒマラヤ登山等も企画しているが、将来の姿はまったく見えてこない現状である。

大学山岳部の衰退をよそに、若者達はさらに自己主張を求め、他のフィールドに楽しみを見い出し、汗を流したいとの動きの中にいる。この動向を見る限り、大学山岳部が求めてきた役割は終わったとする意見を耳にするのも当然のことと言わなければならない。

一時期、「きつく、汚く、危険」とされ敬遠されていた３Ｋが、山岳部を嫌う若者の動向であるとされていたが、現在はその時期を脱し、名声を勝ち取り、金になり、楽しめる対象であれば、厳しく、辛く、危険であってもそれに果敢に挑戦したいとする若者の出現で

ある。この思考性の変化を見る限り、金も名声も得られない大学山岳部の居場所は狭められてきたと見る事が当然であろう。

私は社会が山岳部の見方を誤解しているのだと考えている。事故が起こるから、危険だからとする考えは当然のこととしても、それ以前に“危険を冒し未踏に挑む気概なくして人は一歩も前に進むことができない”とする社会全体が共有しなければならない思想を枯渇させてはならないと考えるからである。拝金主義の社会は、大学山岳部が伝統として求めてきた山登りの思想、パイオニアワークの本質を理解できるほど、文化的に成熟していないための誤解である。

この精神が社会に理解され、拝金主義や強欲資本主義が落ち着きを見せ、社会に新しい価値観が定着していくまで大学山岳部の存続は形を変えてでも継続させなければならないと考える。自然科学分野において、社会・人文科学の分野において先駆者的役割を果たしてきた多くの先輩たちは、多かれ少なかれ、山を知り、山登りを通して高い理想と誇り、思想性を育み今日の文明を築いてきたからである。

古くから山に例えた格言･箴言の類は、山ほどある。山はそれほど高く険しく、美しい、人間との関係において、存在そのものであった。

してみれば、山登りという行為は、人の思いや本質をくまなく表現しているといってよいだろう。登山、それを支えている思想や行動がどう変遷しようが、山が山である限り、人が人である限り、人はそれを求めるのである。それは、日本の中に根ざした自然と共に生き続けていく唯一の証といえるからである。遭難した伊藤、桜井、安西もこのことを求めて山登りを続けていたのだろうと確信している。

(二)登山思想の変遷

1. 近代登山の萌芽

豊かな自然と共に栄えてきた日本の土着の文化の中に、山登りの概念が現われ始めたのは、信仰・宗教登山と言えるだろう。１７世紀から１８世紀にかけて、円空や播隆、泉光院は、その代表的な人として語られているが、宗教家でない医師の津田正生、高島章貞達を知るとき、そこには日本の近代登山の萌芽があったといえる。

時代の発展に伴って人の思想が変化し構築されていく姿を最も如実に示しているのは、人間が困難や未知・未踏の分野に果敢に取り組み切り拓いてきたかを登山や探検の思想の中から知る事ができると言っても言い過ぎではない。

明治から大正の初期、山を志す若者は地方の中・高等学校生を加え、2000 人（内日本山岳会員約７８０名）をはるかに超えていた。着茣蓙（きござ）、金剛杖、草鞋（わらじ）から近代用具に衣替えし、雪と岩を対象とした近代登山は、瞬く間に大きなうねりとなって国内に開花していった。

その根底には、自然と共に生活してきた日本人固有の文化と思想が大きく働いていたといえる。各地域の先住民の生活の中に根ざす山、山に対する信仰、そこから生まれた宗教登山・開山等、明治維新の政府が招いた雇われ外人の影響を無視するものではないが、日本人の若者が持っていた好奇心と繊細なまでの創意工夫の精神は、中世の抑圧や、遺制の桎梏から抜け出せずにいたとはいえ、いたるところで青年達の熱き心に支えられ近代登山への道を拓いてきた。

2. 日本人の自然観と欧州アルピニズム

この「熱き心」は、日本人による学術調査、調査探検の分野に積極的な取り組みを示し、全ての自然科学や社会・人文科学の分野において海外に学び欧米の文化を吸収するための行動が、山河を歩き、跋渉しつくした博物学者や文人によって、明治以降の近代登山は成熟度を深めていった。

日本の近代登山、特に創成期はヨーロッパのアルピニズムとは異なる特性を持って明治初頭から日本独自の発展があり、成立したと考えるのが自然である。あくまでも自然観を基軸としている点では、ヨーロッパのアルピニズムと基本的に異なるものである。

1905 年の日本山岳会の創設に見られる、創期会員の中には、日本の登山界はもとより社会に大きな影響を与えた人材の多さには驚くばかりである。もっとも早く山との関係を深めた博物学者はもとより、科学を意識する価値観と自然観を主体に育った思想と重層しながら日本の近代登山の発展を遂げてきたのである。

日本人の伝統的価値観の尊さを重んじる。自立・自尊の精神が西欧的文明に傾斜していく中で、日本的な登山思想を結実させてきたというべきであろう。

この両者の違いとして言えることは、次のようなことだ。

ヨーロッパアルピニズムが定着する以前、中世のヨーロッパアルプスは、魔女と悪魔の住む世界と考えられ、人の近寄れない所とされていたことからも、わかるように、彼らの思想の中に自然観に類する考え、思想といったものは、まったく無かったのである。“自然と人間を対立軸におき、人間を自然から独立したよりすぐれた存在としてとらえ、人間が理性を持った唯一の生物であり、いかに自然と離れ文明を持つことが人間らしさの度合いであるかというユダヤ･キリスト教の伝統として語られてきた。”

中世社会の拘束から解放されて、欧州の登山思想が生まれたとしても、それは所詮、征服･挑戦の考えが基本であり、困難の克服と競争原理だけから生まれたものである。唯一、ジョン･ラスキン「近代画家論」の中で設けた山岳論で「雲と山は自分にとって生命である」とし、山の尊厳さや美しさを述べていたとしても、当時の登山家にとっては踏み越えてきた行為の一環にすぎないとする精鋭的登山行為の中に埋没してしまったほどだ。

西欧の文芸復興による近代化の風潮が進む中でのラスキンの思いではあったが、自然観に関する限り、800 年前の日本の賢者達の思想を超えるものではない。

従って、日本人の自然観の中で育ち、1300 年以上の歴史をもつ山との関わり、そこから

生まれた思想とは基本的に異なると見るべきである。

3. 人が具備している基本的な思想

明治から大正初期にかけて発展を遂げた日本の近代アルピニズムの根底には、登山技術や用具を具視する方法が同じであっても、自然に生かされ自然と共にあるとする思想を抜きには考える事はできないのである。この日本人の思想は今日にいたり再び、山登りのあり方として輝きを持って受け入れられているのである。

「登山の気風を興作すべし」と提唱した志賀重昂の「日本風景論」が説いた思想に触発され、当時の日本の若者に決定的な影響を及ぼし、時を経て日本の学校山岳部の設立に受け継がれていく事になったと考えたい。

いかなる形の登山であっても、その行為は個人的な思いと行動によって培われてきたといえる。日本の土着に根ざした日本型登山の一つとして、それが信仰、宗教登山に関わる登山であっても、文人たちが描き書き記した足跡であっても、その人たちの足跡は、極めて強い自己主張に基づくものといえる。近代登山については未知を求めて果敢な行動を展開してきた足跡の中に集団や組織によって果たされてきた実績は多いが、大学山岳部の活動はその顕著なものだ。この集団を作り、牽引して来た「個人の意志と行動力」によってなされたにほかならない。大学における山岳部の出現や社会人山岳会の結成など、その大半はとてつもなく強い個性を持った個人の意志と魅力、個人の培った実績などによって集団が結成され、同じ志を持つ仲間と共に発展してきた例がほとんどである。このことは、やがて一つの流行となり発展し、日本の近代登山を開花させ、ごく最近までその姿をとどめていた事になる。しかしながら、江戸末期から明治初頭に活躍した探検家や、戦中に広く中央アジアに足跡を記した人たちは個人の意志に社会性が伴う行動が多く、政府や社会の要請を峙して行動した例が見受けられる。

今や、南極観測、様々な分野の学術調査、環境評価にはじまり宇宙での生活など、個人的な探究心のみならず、政府や社会からの要請に応えていくための行動の中からも、未知な世界に対する好奇心と挑戦の心が芽生え、未踏の荒々しい分野に生命の充実を宿していく事例は数えきれないほどだ。この人間が持っている心、知りたい欲求、未知への憧れ、真理の探究、オリジナリティを求める心など、本質的に人が具備している思想は今も昔も少しも変わっていない。登山や探検の思想は、この本質をよく現していると言えるだけに、大切にし、今後あらゆる分野に活かされていくべきと考える。